



Title	データからみる中古の指示代名詞
Author(s)	岡崎, 友子
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 72-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90790
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

データからみる中古の指示代名詞

岡 崎 友 子

一 はじめに

佐久間(一九五五)に始まるとされる日本語の指示詞研究は、現代語の指示代名詞を中心に活発に議論がなされ、精緻な分析が多く見られる。歴史的研究に関しては、上代の指示体系を扱った橋本(一九六六)や、用法が不安定なソ系列(藤本二〇〇八等)、形態が交替するカ・ア系列(古田一九五七等)といった特定の時代や個別の指示代名詞に議論の焦点があるものが多く、歴史を通じて安定した用法をもつと考えられるコ系列まで含めた指示体系全体の研究は、あまり見られない。その中で、岡崎(二〇一〇)では歴史的な指示体系と変遷を明らかにしているが、その対象は指示副詞が主であり、指示代名詞については調査・分析が及んでいない部分がある。

そこで、指示代名詞を中心とした通史的な指示体系の解明を目的とし、岡崎(二〇二二)では、上代(『万葉集』)の調査・分析を

行った。そして、本稿は次の段階として中古の指示代名詞を巨視的にみつめることから始める。

その理由は、中古の指示詞を考察する際に、以下のような疑問と調査の必要性を以前から感じてきたことにある。これまで日本語学の文法史研究では、中古の和文学作品を同時代の同質な言語資料として扱うことが多かった。しかし、それらの成立時期は、およそ九〇〇年代から一一一〇年代という幅があるものであり、また、ジャンルも上代とは違い、物語、日記、歌集、随筆と多様なものを含む。つまり、中古の間に形態・用法に起こった変化やジャンル(文体)による出現・用法の偏り等は見過ごされてきた可能性がある。さらに、指示詞各系列の指示用法から考えると、地の文・会話文・歌といった本文種別による偏りも予想される。

筆者はこれらに関して、長年、調査の必要性を感じてきた。しかし、指示体系内にはいくつもの語形があり、さらに指示詞は文を成り立たせる上でよく使用されることから、例数は非常に多く、

それらの例を成立時期・ジャンル・本文種別で分析するのは困難であったため、手つかずのままであった。

そして、近年、『日本語歴史コーパス』（これ以降CH）とする）の開発が進み、ようやくこれらの調査が容易となった。そこで、本稿ではCHの特性を活かし、成立年・系列・語形（型）・作者の位相・ジャンル・本文種別から、中古の指示代名詞の調査・分析を行い、その使用の特徴を示していく。

二 調査方法・対象

CH平安時代編・和歌集編^注を用い、指示代名詞「コ・ソ・カ・ア」「コレ・ソレ・カレ・アレ」「ココ・ソコ・カシコ・アソコ」「コナタ・ソナタ・アナタ」（「カナタ」は複合した形「コナタカナタ」のみのため対象外）を調査する。「中納言」の検索条件を以下に示す。

○語彙素「是・其・彼」、語彙素読み「コ・ソ・カ（ア）^{注二}」、品詞「代名詞」。これらを「ゼロ型」とよぶ。

○語彙素「此れ・其れ・彼・彼れ」、語彙素読み「コレ・ソレ・カレ・アレ」、品詞「代名詞」。これらを「レ型」とよぶ。

○語彙素「此処・其処・彼処・彼処」、語彙素読み「ココ・ソコ・カシコ・アソコ」、品詞「代名詞」。これらを「コ型」とよぶ。

○語彙素「此方・其方・彼方」、語彙素読み「コナタ・ソナタ・アナタ」、品詞「代名詞」。これらを「ナタ型」とよぶ。

表1 作品名と成立年

	作品名	成立年
前期	竹取物語	900
	古今和歌集	906
	伊勢物語	920
	土佐日記	934
	大和物語	951
	後撰和歌集	955
	平中物語	960
	蜻蛉日記	974
中期	落窪物語	986
	枕草子	1001
	拾遺和歌集	1005
	和泉式部日記	1010
	源氏物語	1010
	紫式部日記	1010
	堤中納言物語	1055
	更級日記	1059
	後拾遺和歌集	1087
	大鏡	1100
後期	讃岐典侍日記	1110
	金葉和歌集	1128
	詞花和歌集	1151
	千載和歌集	1188

表2 中古資料の全用例数

コ系列	ソ系列	カ系列	ア系列
コ	ソ	カ	（ア）
3879	1589	1177	30
コレ	ソレ	カレ	アレ
1109	693	120	31
ココ	ソコ	カシコ	アソコ
529	154	146	1
コナタ	ソナタ	カナタ	アナタ
220	60	対象外	128

まず、指示代名詞の調査結果を成立年順^{注三}（作品名と成立年は表1。以降、本文・表における作品名は、太字・下線部のみで示す）で示し、さらに、CHのジャンル「作り物語・歌物語・和歌

集・日記」^{註四}、作者の位相、本文種別「会話文・地の文・歌・詞章等」からも各指示代名詞の使用傾向を観察する。

なお、本稿では「コ・コレ・ココ・コナタ」をコ系列、「ソ・ソレ・ソコ・ソナタ」をソ系列、「カ・カレ・カシコ」をカ系列、「ア・アレ・アソコ・アナタ」をア系列とし、また、便宜上、九〇〇年代『竹取』から『落窪』を前期、一〇〇〇年代『枕草』から『後拾』を中期、一一〇〇年代『大鏡』から『千載』を後期とよぶ。中古の全用例数を表2に示す。

三 成立年・系列・語形（型）からみる指示代名詞

CHJの調査結果を語形（型、以降「型」のみとする）で分け、成立年順に表3から表6に示す。表の各語の縦列は左が例数、右の％は各作品における各指示代名詞の出現率となっている^{註五}（例：『竹取』の「コ・ソ・カ（ア）」は一二二例、その中で「コ」は七六例であり、七六÷一二二＝〇・六二三で「六二・三％」となる。小数点第二位以下四捨五入）。表の上段、各語の右の括弧「」は、その語の全作品における平均値であり、平均値より高いものは太字で示してある。以下、まず全系列および各系列で観察し、次に各型でみる。

（一）「全系列および各系列」表3から表6
「A」（全系列）「ナタ型」以外の型でコ系列、ソ系列、カ系列、ア系列の順で用例数が多い。「ナタ型」はコ系列、ア系列、ソ系列の

表3 各作品における「ゼロ型」

ゼロ型	コ [55.5]		ソ [29.5]		カ [14.3]		ア [0.7]		計
竹取	76	62.3%	24	19.7%	20	16.4%	2	1.6%	122
古今	62	58.5%	24	22.6%	20	18.9%	0	0.0%	106
伊勢	66	48.5%	47	34.6%	23	16.9%	0	0.0%	136
土佐	60	76.9%	14	17.9%	4	5.1%	0	0.0%	78
大和	147	65.3%	51	22.7%	27	12.0%	0	0.0%	225
後撰	35	44.9%	21	26.9%	22	28.2%	0	0.0%	78
平中	185	74.6%	40	16.1%	23	9.3%	0	0.0%	248
蜻蛉	150	62.0%	64	26.4%	26	10.7%	2	0.8%	242
落窪	246	61.7%	60	15.0%	88	22.1%	5	1.3%	399
枕草	126	47.2%	117	43.8%	21	7.9%	3	1.1%	267
拾遺	33	55.9%	11	18.6%	15	25.4%	0	0.0%	59
和泉	28	59.6%	15	31.9%	4	8.5%	0	0.0%	47
源氏	1759	56.3%	603	19.3%	756	24.2%	4	0.1%	3122
紫式	27	37.0%	35	47.9%	11	15.1%	0	0.0%	73
堤中	72	62.6%	26	22.6%	17	14.8%	0	0.0%	115
更級	73	55.7%	53	40.5%	2	1.5%	3	2.3%	131
後拾	60	45.8%	40	30.5%	31	23.7%	0	0.0%	131
大鏡	557	65.6%	248	29.2%	38	4.5%	6	0.7%	849
讃岐	33	44.0%	38	50.7%	0	0.0%	4	5.3%	75
金葉	19	48.7%	14	35.9%	5	12.8%	1	2.6%	39
詞花	10	35.7%	13	46.4%	5	17.9%	0	0.0%	28
千載	55	52.4%	31	29.5%	19	18.1%	0	0.0%	105
計	3879		1589		1177		30		6675

表4 各作品における「レ型」

レ型	コレ [61.8]		ソレ [31.6]		カレ [4.9]		アレ [1.7]		計
竹取	36	66.7%	17	31.5%	1	1.9%	0	0.0%	54
古今	29	72.5%	11	27.5%	0	0.0%	0	0.0%	40
伊勢	18	51.4%	15	42.9%	2	5.7%	0	0.0%	35
土佐	21	87.5%	3	12.5%	0	0.0%	0	0.0%	24
大和	47	50.5%	36	38.7%	10	10.8%	0	0.0%	93
後撰	12	75.0%	2	12.5%	2	12.5%	0	0.0%	16
平中	18	39.1%	25	54.3%	2	4.3%	1	2.2%	46
蜻蛉	88	58.7%	47	31.3%	13	8.7%	2	1.3%	150
落窪	103	72.5%	30	21.1%	7	4.9%	2	1.4%	142
枕草	128	51.6%	93	37.5%	19	7.7%	8	3.2%	248
拾遺	7	58.3%	4	33.3%	1	8.3%	0	0.0%	12
和泉	13	54.2%	8	33.3%	2	8.3%	1	4.2%	24
源氏	333	56.2%	206	34.7%	49	8.3%	5	0.8%	593
紫式	13	38.2%	18	52.9%	3	8.8%	0	0.0%	34
堤中	30	58.8%	16	31.4%	4	7.8%	1	2.0%	51
更級	24	66.7%	8	22.2%	0	0.0%	4	11.1%	36
後拾	24	66.7%	9	25.0%	3	8.3%	0	0.0%	36
大鏡	105	46.7%	116	51.6%	2	0.9%	2	0.9%	225
讃岐	23	47.9%	20	41.7%	0	0.0%	5	10.4%	48
金葉	13	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	13
詞花	2	66.7%	1	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	3
千載	22	73.3%	8	26.7%	0	0.0%	0	0.0%	30
計	1109		693		120		31		1953

表5 各作品における「コ型」

コ型	ココ [63.5]		ソコ [26.4]		カシコ [10.1]		アソコ [0.0]		計
竹取	5	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5
古今	6	42.9%	8	57.1%	0	0.0%	0	0.0%	14
伊勢	6	37.5%	9	56.3%	1	6.3%	0	0.0%	16
土佐	6	85.7%	0	0.0%	1	14.3%	0	0.0%	7
大和	8	53.3%	6	40.0%	1	6.7%	0	0.0%	15
後撰	5	26.3%	10	52.6%	4	21.1%	0	0.0%	19
平中	9	60.0%	5	33.3%	1	6.7%	0	0.0%	15
蜻蛉	71	65.1%	19	17.4%	19	17.4%	0	0.0%	109
落窪	95	75.4%	18	14.3%	13	10.3%	0	0.0%	126
枕草	26	57.8%	19	42.2%	0	0.0%	0	0.0%	45
拾遺	8	80.0%	1	10.0%	1	10.0%	0	0.0%	10
和泉	7	58.3%	1	8.3%	4	33.3%	0	0.0%	12
源氏	220	66.7%	23	7.0%	86	26.1%	1	0.3%	330
紫式	4	66.7%	1	16.7%	1	16.7%	0	0.0%	6
堤中	22	61.1%	4	11.1%	10	27.8%	0	0.0%	36
更級	6	26.1%	16	69.6%	1	4.3%	0	0.0%	23
後拾	6	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6
大鏡	7	38.9%	9	50.0%	2	11.1%	0	0.0%	18
讃岐	1	25.0%	3	75.0%	0	0.0%	0	0.0%	4
金葉	3	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3
詞花	1	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1
千載	7	70.0%	2	20.0%	1	10.0%	0	0.0%	10
計	529		154		146		1		830

表6 各作品における「ナタ型」

ナタ型	コナタ [34.6]		ソナタ [16.1]		アナタ [35.6]		計
竹取	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
古今	1	25.0%	0	0.0%	3	75.0%	4
伊勢	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	1
土佐	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%	2
大和	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
後撰	3	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	3
平中	3	75.0%	0	0.0%	1	25.0%	4
蜻蛉	14	46.7%	2	6.7%	14	46.7%	30
落窪	10	83.3%	0	0.0%	2	16.7%	12
枕草	16	51.6%	4	12.9%	11	35.5%	31
拾遺	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%	2
和泉	6	60.0%	1	10.0%	3	30.0%	10
源氏	148	56.7%	38	14.6%	75	28.7%	261
紫式	4	36.4%	3	27.3%	4	36.4%	11
堤中	5	45.5%	2	18.2%	4	36.4%	11
更級	4	57.1%	2	28.6%	1	14.3%	7
後拾	0	0.0%	1	25.0%	3	75.0%	4
大鏡	4	57.1%	2	28.6%	1	14.3%	7
讃岐	2	66.7%	1	33.3%	0	0.0%	3
金葉	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
詞花	0	0.0%	3	100.0%	0	0.0%	3
千載	0	0.0%	1	50.0%	1	50.0%	2
計	220		60		128		408

順となる。

「B」（コ系列）平均値を超えるもの（太字）に注目すると「レ・コ・ナタ型」は「ゼロ型」に比べ平均値を超えるものが少なく、目立たない印象を受ける。しかし、各型の平均値は「レ型」六一・

八%、「コ型」六三・五%と、「レ・コ型」は「ゼロ型」五五・五%より高い。このような結果が出たのは、(Ⅰ)「レ型」は「金葉」、「コ型」は「竹取・金葉・詞花」がコ系列のみである(二〇〇%)、(Ⅱ)「ゼロ型」は中央値(「ゼロ型」五六・一%、「レ型」五八・七%、「コ型」六三・一%、「ナタ型」四〇・九%)に近いものが多く満遍なく使われている、(Ⅲ)「ゼロ型」はソ系列が二九・五%、カ系列が一四・三%と他系列もまとまってみられる、といった要因によるものであろう。例数は「ゼロ型」が圧倒的に多く、次に「レ型」、「コ型」、「ナタ型」となる。「ナタ型」の「コナタ」は、例がみられない作品が多い。

「C」（ソ系列）平均値としては「レ型」が三一・六%と、ソ系列の中で一番高い。ただし、「ゼロ型」が二九・五%となるのは、「コ」(「B」(Ⅲ)と同じく)他系列もまとまってみられるためであり、用例数としては「ゼロ型」が圧倒的に多い。なお、「ゼロ型」の「ソ」は同じ「ゼロ型」の「コ」に比べて、平均値を超えるものが少なくバラつきはあるが、〇%のものはない。次に、「レ型」は「コ型」に比べると平均値に近いものが多いが、〇%の「金葉」から五四・三%の「大和」と、ある程度の振れ幅はある。さらに「コ型」は〇%の「竹取・土佐・後拾・金葉・詞花」から六九・六%「更級」と振れ幅が大きく、例がみられない作品が多い。例数は「ゼロ型」が一番多く、次に「レ型」、「コ型」、「ナタ型」となる。「ナタ型」は前期では「落窪」を除き例がみられず、現れるのは中期以降であり、他のソ系列に比べて出現率が低い。

「D」(カ系列)「ゼロ型」の平均値が一四・三%と一番高く、カ系列の中で平均値を超えるものも多い。ただし、『讃岐』〇%から『後撰』二八・二%とバラつきはみられる。次に、「レ型」では〇%「古今・土佐・更級・讃岐・金葉・詞花・千載」から一二・五%『後撰』、「コ型」では〇%『竹取・古今・枕草・後拾・讃岐・金葉・詞花』から三三・三%『和泉』と振れ幅が大きく、例がみられない作品も多い。例数は他の系列とは違い、「ゼロ型」、「コ型」、「レ型」の順に多い。

「E」(ア系列)「ナタ型」は前期からまとまってみられるが、「ゼロ型・レ型」は僅かであり、「コ型」はほぼみられない。

以上、全体をまとめておくとコ系列は全ての型で例数が多いが、安定してみられる「ゼロ型」と、振れ幅のある「レ・コ型」という違いがある。ソ系列は各型ではばらつきがあり、特に「コ型」は振れ幅が大きく、例がない作品がまとまってみられる。カ系列は「ゼロ型」が比較的満遍なく見られるが、「レ・コ型」は〇%の作品が多く、傾向としては主に前・後期は低く、中期頃に高い。特に後期は〇%のものが多く、ア系列は「コ型」はほぼみられず、「ゼロ・レ型」が中期以降いくらかみられる。

次に、各型で観察する。出現に特徴がみられるものについては、「傾向」としてまとめておく。

(2)「ゼロ型」表3

①(コ)他の型に比べて満遍なくみられるが、特に七〇%代の『土佐・平中』、六〇%代の『大鏡・大和・堤中・竹取・蜻蛉・落窪』の順に割合が高い。

②(ソ)中期以降に平均値を超えるものが多い。五〇%代の『讃岐』、四〇%代の『紫式・詞花・枕草・更級』の順に割合が高い。

③(カ)前期の始めと中期に平均値を超えるものが多い。二〇%代である『後撰・拾遺・源氏・後拾遺・落窪』の順に割合が高い。「コ・ソ」と違い、「カ」は例がみられない作品がある。

④(ア)『竹取』を除き出現は「蜻蛉」以降であり、『讃岐』の割合が高い。『讃岐』では「カ」の例はみられず、『更級』では「カ」より「ア」が高い。

(2)から(他の型に比べ)「ゼロ型(ア系列を除く)」は、どの作品にもみられる型であるといえる。また、例外はあるが、「コ」が男性作者、「ソ・カ」は女性作者・和歌集、もしくは前期は「コ」、中・後期は「ソ・カ」が高い傾向にある(「傾向1」とする)。そして、和歌集を除き、中古の後期あたりで「ゼロ型」は、カ系列からア系列へと移行し始めたと思われる(「傾向2」とする)。

(3)「レ型」表4

①(コレ)全体で述べたように「ゼロ型」「コ」に比べてコ系列がそれほど目立たない。なお、『金葉』が一〇〇%、八〇%代の『土

佐』、七〇%代の『後撰・千載・古今・落窪』の順に割合が高い。

②(ソレ) 平均値は「ゼロ型」「ソ」より高いが、出現にバラつきがある。ただし、〇%は『金葉』のみである。五〇%代の『平中・紫式・大鏡』、四〇%代の『伊勢・讃岐』の順に割合が高い。

③(カレ) 平均値がカ系列の中で一番低い。一〇%代の『後撰・大和』が割合が高く、後期になるとほぼみられなくなる。例がみられない作品が七つある。

④(アレ) ア系列「アレ」の出現は『平中』以降であり、『更級・讃岐』の割合が高い。後期の和歌集にはみられない。

(3) から「レ型」のカ系列からア系列への移行についても、先の「傾向2」の「ゼロ型」と同じである。また、先の「傾向1」では「ゼロ型」はコ系列は男性作者、ソ・カ系列は女性作者・和歌集であるとしたが、(3) ①のように「レ型」では和歌集に「コレ」が高く、同傾向ではない。

(4) 「コ型」表5

①(ココ) 「レ型」と同じく「ゼロ型」「コ」ほどコ系列が目立たない。なお、一〇〇%の『竹取・後拾・金葉・詞花』、八〇%代の『土佐・拾遺』の順に割合が高い。

②(ソコ) 平均値より高いものは前期に偏る。ただし、七五・〇%『讃岐』、六九・六%『更級』のように後期の作品に特に高いものがみられる。また、例がみられない作品が五つあり(「ナタ型」を

除き) ソ系列の中で最も多い。

③(カシコ) 平均値を超えるものは中期に偏る。三三・三%『和泉』、二〇%代の『堤中・源氏・後撰』の順に割合が高い。例がみられない作品が七つある。

④(アソコ) 中古では、ほぼみられない(「アシコ」一例)。

(4) から「コ型」は例がみられない作品が多く、「ナタ型」を除き、最もバラつきがある型である。なお、和歌集にはコ系列「ココ」が高く、「レ型」と同じ傾向である。また、ソ系列「ソコ」は女性作者に高く、「ゼロ型」と同傾向である。ただし、「ソコ」は前期にも高くみられるため、注意が必要である「傾向1」。さらにア系列の「コ型」は、中古ではまだ未発達と予測される「傾向2」。

(5) 「ナタ型」表6

①(コナタ) 出現率はコ系列の中で最も低い。中期にまとまってみられる。前期『竹取・伊勢・土佐・大和』と和歌集『拾遺・後拾・金葉・詞花・千載』には例がみられない。

②(ソナタ) 出現率はソ系列の中で最も低い。中・後期にまとまってみられ、前期では『蜻蛉』以外みられない。

③(アナタ) 出現率がア系列の中で最も高く、早い時期からみられる。ただし、例がみられない作品が六つある。

(5) から「ナタ型」に関しては、かなり他の型とは違う傾向が

みて取れる。個別の検証が必要であろう（「傾向3」とする）。
以上、各型からみた「予想」をまとめる。

(6)

「傾向1」「ゼロ型」においてコ系列は男性作者（または前期）、ソ・カ系列は女性作家・和歌集（または中後期）が高いという傾向を読み取った。しかし、「レ・コ型」では、異なる傾向がみられる。

「傾向2」中古の後期あたりで（和歌集を除く）、カ系列からア系列へ移行したことが予想される。なお、ア系列「コ型」は中古では未発達であったと予想される。

「傾向3」「ナタ型」は他の型とはかなり違う傾向をみせる。

四 作者の位相・ジャンルからみる指示代名詞

前節で示したように、成立年・各系列で、ある程度の傾向を指摘することができるが、型別からは

表7 作者が男性

ゼロ型	コ	ソ	カ	ア	レ型	コレ	ソレ	カレ	アレ
竹取	62.3%	19.7%	16.4%	1.6%	竹取	66.7%	31.5%	1.9%	0.0%
伊勢	48.5%	34.6%	16.9%	0.0%	伊勢	51.4%	42.9%	5.7%	0.0%
土佐	76.9%	17.9%	5.1%	0.0%	土佐	87.5%	12.5%	0.0%	0.0%
大和	65.3%	22.7%	12.0%	0.0%	大和	50.5%	38.7%	10.8%	0.0%
平中	74.6%	16.1%	9.3%	0.0%	平中	39.1%	54.3%	4.3%	2.2%
落窪	61.7%	15.0%	22.1%	1.3%	落窪	72.5%	21.1%	4.9%	1.4%
大鏡	65.6%	29.2%	4.5%	0.7%	大鏡	46.7%	51.6%	0.9%	0.9%

コ型	ココ	ソコ	カシコ	アソコ	ナタ型	コナタ	ソナタ	アナタ
竹取	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	竹取	0.0%	0.0%	0.0%
伊勢	37.5%	56.3%	6.3%	0.0%	伊勢	0.0%	0.0%	100.0%
土佐	85.7%	0.0%	14.3%	0.0%	土佐	0.0%	0.0%	100.0%
大和	53.3%	40.0%	6.7%	0.0%	大和	0.0%	0.0%	0.0%
平中	60.0%	33.3%	6.7%	0.0%	平中	75.0%	0.0%	25.0%
落窪	75.4%	14.3%	10.3%	0.0%	落窪	83.3%	0.0%	16.7%
大鏡	38.9%	50.0%	11.1%	0.0%	大鏡	66.7%	33.3%	0.0%

表8 作者が女性

ゼロ型	コ	ソ	カ	ア	レ型	コレ	ソレ	カレ	アレ
蜻蛉	62.0%	26.4%	10.7%	0.8%	蜻蛉	58.7%	31.3%	8.7%	1.3%
枕草	47.2%	43.8%	7.9%	1.1%	枕草	51.6%	37.5%	7.7%	3.2%
和泉	59.6%	31.9%	8.5%	0.0%	和泉	54.2%	33.3%	8.3%	4.2%
源氏	56.3%	19.3%	24.2%	0.1%	源氏	56.2%	34.7%	8.3%	0.8%
紫式	37.0%	47.9%	15.1%	0.0%	紫式	38.2%	52.9%	8.8%	0.0%
更級	55.7%	40.5%	1.5%	2.3%	更級	66.7%	22.2%	0.0%	11.1%
讃岐	44.0%	50.7%	0.0%	5.3%	讃岐	47.9%	41.7%	0.0%	10.4%

コ型	ココ	ソコ	カシコ	アソコ	ナタ型	コナタ	ソナタ	アナタ
蜻蛉	65.1%	17.4%	17.4%	0.0%	蜻蛉	46.7%	6.7%	46.7%
枕草	57.8%	42.2%	0.0%	0.0%	枕草	51.6%	12.9%	35.5%
和泉	58.3%	8.3%	33.3%	0.0%	和泉	60.0%	10.0%	30.0%
源氏	66.7%	7.0%	26.1%	0.3%	源氏	56.7%	14.6%	28.7%
紫式	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%	紫式	36.4%	27.3%	36.4%
更級	26.1%	69.6%	4.3%	0.0%	更級	57.1%	28.6%	14.3%
讃岐	25.0%	75.0%	0.0%	0.0%	讃岐	66.7%	33.3%	0.0%

読み取りにくい。そこで、「傾向1」の作者の位相・ジャンル（和歌集）において、いづらか傾向がみられたことから、当節では、作者の位相とジャンルに注目し再分析してみる。まず、作者の性別

で分類したものを表7と表8に示す。男性(表7)は比較的「ゼロ型」「コ」が高く、また、女性(表8)は「ナタ型」(特に「コナタ」)が高く、「レ型」「カレ・アレ」も男性作者の作品に比べ平均値を超えるものが多い。しかし、その他に特に目立つ特徴はみられない。次に、ジャンル「作り物語・和歌集・日記・歌物語」で観察する。

(7) 表9 「作り物語」

①「ゼロ型」は全作品「コ」と「カ」高い。

②「レ型」は「竹取」を除き「カレ」が高い。

③「コ型」は「竹取」を除き「カシコ」が高い。また、「堤中」除き、「ココ」も高い。「竹取」は「ココ」のみ。

④「ナタ型」は「竹取」除き、「コナタ」が高い。なお、中期以降、「ソナタ・アナタ」もまとまってみられる。

(7) から「作り物語」は「竹取」除き、全体でかなり近い傾向を示す。その中でも「ゼロ型」「コ・カ」は「竹取」も含め同傾向である。

(8) 表10 「和歌集」

表9 作り物語

ゼロ型	コ	ソ	カ	ア	コ型	ココ	ソコ	カシコ	アソコ
竹取	62.3%	19.7%	16.4%	1.6%	竹取	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
落窪	61.7%	15.0%	22.1%	1.3%	落窪	75.4%	14.3%	10.3%	0.0%
源氏	56.3%	19.3%	24.2%	0.1%	源氏	66.7%	7.0%	26.1%	0.3%
堤中	62.6%	22.6%	14.8%	0.0%	堤中	61.1%	11.1%	27.8%	0.0%

レ型	コレ	ソレ	カレ	アレ	ナタ型	コナタ	ソナタ	アナタ
竹取	66.7%	31.5%	1.9%	0.0%	竹取	0.0%	0.0%	0.0%
落窪	72.5%	21.1%	4.9%	1.4%	落窪	83.3%	0.0%	16.7%
源氏	56.2%	34.7%	8.3%	0.8%	源氏	56.7%	14.6%	28.7%
堤中	58.8%	31.4%	7.8%	2.0%	堤中	45.5%	18.2%	36.4%

表10 和歌集

ゼロ型	コ	ソ	カ	ア	コ型	ココ	ソコ	カシコ	アソコ
古今	58.5%	22.6%	18.9%	0.0%	古今	42.9%	57.1%	0.0%	0.0%
後撰	44.9%	26.9%	28.2%	0.0%	後撰	26.3%	52.6%	21.1%	0.0%
拾遺	55.9%	18.6%	25.4%	0.0%	拾遺	80.0%	10.0%	10.0%	0.0%
後拾	45.8%	30.5%	23.7%	0.0%	後拾	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
金葉	48.7%	35.9%	12.8%	2.6%	金葉	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
詞花	35.7%	46.4%	17.9%	0.0%	詞花	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%
千載	52.4%	29.5%	18.1%	0.0%	千載	70.0%	20.0%	10.0%	0.0%

レ型	コレ	ソレ	カレ	アレ	ナタ型	コナタ	ソナタ	アナタ
古今	72.5%	27.5%	0.0%	0.0%	古今	25.0%	0.0%	75.0%
後撰	75.0%	12.5%	12.5%	0.0%	後撰	100.0%	0.0%	0.0%
拾遺	58.3%	33.3%	8.3%	0.0%	拾遺	0.0%	0.0%	100.0%
後拾	66.7%	25.0%	8.3%	0.0%	後拾	0.0%	25.0%	75.0%
金葉	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	金葉	0.0%	0.0%	0.0%
詞花	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	詞花	0.0%	100.0%	0.0%
千載	73.3%	26.7%	0.0%	0.0%	千載	0.0%	50.0%	50.0%

①「ゼロ型」は『後拾・金葉』除き、前・中期は「コ・カ」、後期は「ソ・カ」に偏る。「ア」は出現するのは『金葉』のみ。
②「レ型」は『拾遺』除き、「コレ」が高い。「カレ」は『後撰・

表11 日記

ゼロ型	コ	ソ	カ	ア	コ型	ココ	ソコ	カシコ	アソコ
土佐	76.9%	17.9%	5.1%	0.0%	土佐	85.7%	0.0%	14.3%	0.0%
蜻蛉	62.0%	26.4%	10.7%	0.8%	蜻蛉	65.1%	17.4%	17.4%	0.0%
和泉	59.6%	31.9%	8.5%	0.0%	和泉	58.3%	8.3%	33.3%	0.0%
紫式	37.0%	47.9%	15.1%	0.0%	紫式	66.7%	16.7%	16.7%	0.0%
更級	55.7%	40.5%	1.5%	2.3%	更級	26.1%	69.6%	4.3%	0.0%
讃岐	44.0%	50.7%	0.0%	5.3%	讃岐	25.0%	75.0%	0.0%	0.0%
レ型	コレ	ソレ	カレ	アレ	ナタ型	コナタ	ソナタ	アナタ	
土佐	87.5%	12.5%	0.0%	0.0%	土佐	0.0%	0.0%	100.0%	
蜻蛉	58.7%	31.3%	8.7%	1.3%	蜻蛉	46.7%	6.7%	46.7%	
和泉	54.2%	33.3%	8.3%	4.2%	和泉	60.0%	10.0%	30.0%	
紫式	38.2%	52.9%	8.8%	0.0%	紫式	36.4%	27.3%	36.4%	
更級	66.7%	22.2%	0.0%	11.1%	更級	57.1%	28.6%	14.3%	
讃岐	47.9%	41.7%	0.0%	10.4%	讃岐	66.7%	33.3%	0.0%	

表12 歌物語

ゼロ型	コ	ソ	カ	ア	コ型	ココ	ソコ	カシコ	アソコ
伊勢	48.5%	34.6%	16.9%	0.0%	伊勢	37.5%	56.3%	6.3%	0.0%
大和	65.3%	22.7%	12.0%	0.0%	大和	53.3%	40.0%	6.7%	0.0%
平中	74.6%	16.1%	9.3%	0.0%	平中	60.0%	33.3%	6.7%	0.0%
レ型	コレ	ソレ	カレ	アレ	ナタ型	コナタ	ソナタ	アナタ	
伊勢	51.4%	42.9%	5.7%	0.0%	伊勢	0.0%	0.0%	100.0%	
大和	50.5%	38.7%	10.8%	0.0%	大和	0.0%	0.0%	0.0%	
平中	39.1%	54.3%	4.3%	2.2%	平中	75.0%	0.0%	25.0%	

拾遺・後拾」に高く、「アレ」はみられない。
 ③「コ型」は前期は「ソコ」、中・後期は「ココ」に偏る。「カシコ」は少なく、「アソコ」はみられない。

④「ナタ型」は前期は「コナタ」、中・後期は「ソナタ」に偏る。和歌集の中でア系列は「アナタ」のみ比較的まとまってみられる。

(8) から「和歌集」では「ナタ型」を除き) ア系列はほぼ用いられない傾向にあるといえる。また、前期と後期で傾向が分かれているようにもみえる。特に、前期は「ココ」より「ソコ」が高いが、中・後期は「ココ」が高い。そして、他のジャンルでは「コナタ」は中・後期にまとまってみられるが、「和歌集」ではみられない。さらに、前・中期にみられた「カレ」は、後期ではみられなくなる。

(9) 表11「日記」

①「ゼロ型」は比較的、中古の前半に「コ」、後半に「ソ」が高い。

②「レ型」はア系列「アレ」が後期に高くみられるが、その他の系列はまとまらない。

③「コ型」は『更級・讃岐』が「ソコ」に偏り、それ以外は「カシコ」が高い。

④「ナタ型」は『土佐』が「アナタ」のみであり、それ以外は「コナタ」が高く見られる。『紫式』以降は「ソナタ」も高い。

(9) から「日記」は「ナタ型」が高い傾向であるといえる

が、先の「作り物語」ほど、まとまった傾向ではない。

(10) 表12 「歌物語」

①「ゼロ型」は『伊勢』は「ソ・カ」、『大和・平中』は「コ」が高い。

②「レ・コ型」はソ系列「ソレ・ソコ」が高い。

(10) から「歌物語」は特にソ系列「レ・コ型」が高く同傾向をみせる。また、「ゼロ型」で『伊勢』は異なる傾向をみせる。

以上、ジャンルで出現傾向を探ってきたが、先に述べた型別よりも明らかな傾向を指摘できるように思われる。これらのことから、三節に示した成立年(各系列)、そして、このジャンルが指示代名詞の出現傾向を左右するものであると予測する。

ところで、成立年と各系列で傾向がみえるのは、時間による言語変化と指示用法から分析可能かもしれない。しかし、ジャンルで同傾向がみられるのはなぜであろうか。

そこで、このジャンルによる傾向は、本文種別が関係するものと予想し、次の(11)【Q】を中心に、次節で検証する。

(11)

【Q1】「和歌集」では(「ナタ型」を除き)ア系列はみられないと述べたが、これは中古の資料全体で「歌」にはア系列が用いられないということだろうか。また、(8)で「和歌集」に「カレ」が

みられるとしたが、(ア系列と全く同じ用法とは考えられないが)遠称のカ系列は「歌」に用いられるのだろうか。

【Q2】「作り物語」の各作品が同傾向をみせるのは、他のジャンルに比べ「地の文」(会話文)が多い等、本文種別の構成の影響であろうか。また、「日記」も似た本文種別の構成が想像されるが、なぜ、同傾向とならないのだろうか。

【Q3】「歌物語」の各作品もある程度、同傾向をみせるが、『伊勢』のみやや相違するのは、なぜだろうか。また、「歌物語」の各作品で「ソレ・ソコ」が高いのは、なぜだろうか。

五 本文種別からみる指示代名詞

本文種別で各指示代名詞を分類したものを、表13から表16に示す(表の各語の縦列は左が例数、右の%は各指示代名詞の各本文種別における出現率となっている。例えばコ系列「コ」は三八七九例、その中で「歌」は二〇一例であるので、 $201 \div 3879 \approx 0.052$ で「五・二%」となる。小数点第二位以下四捨五入)。さらに、表17から表19に「作り物語・日記・歌物語」の各本文種別における短単位語彙素の語数を示す(語数は「記号等除外・全て」。各作品の各本文種別の語数を、各作品の総語数で割り、%で示してある。小数点第二位以下四捨五入)。

まず、【Q1】について、表16から分かるように、中古ではア系列は「アナタ」を除き、本文種別「歌」にはみられず(主として「会話」)、さらにカ系列は表15に示すように、本文種別「歌」にお

表13 本文種別（コ系列）

コ系列	コ		コレ		ココ		コナタ	
歌	201	5.2%	65	5.9%	37	7.0%	7	3.2%
会話	1533	39.5%	501	45.2%	287	54.3%	62	28.2%
会引	89	2.3%	42	3.8%	26	4.9%	5	2.3%
古注	6	0.2%	10	0.9%	0	0.0%	0	0.0%
古歌	1	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
左注	17	0.4%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
詞書	53	1.4%	29	2.6%	8	1.5%	0	0.0%
手紙	16	0.4%	1	0.1%	6	1.1%	1	0.5%
地の文	1963	50.6%	459	41.4%	165	31.2%	145	65.9%
計	3879		1109		529		220	

表14 本文種別（ソ系列）

ソ系列	ソ		ソレ		ソコ		ソナタ	
歌	79	5.0%	40	5.8%	20	13.0%	6	10.0%
会話	625	39.3%	333	48.1%	63	40.9%	12	20.0%
会引	24	1.5%	19	2.7%	9	5.8%	1	1.7%
古注	2	0.1%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
古歌	1	0.1%	1	0.1%	0	0.0%	0	0.0%
左注	7	0.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
詞書	74	4.7%	3	0.4%	9	5.8%	1	1.7%
手紙	13	0.8%	1	0.1%	0	0.0%	1	1.7%
地の文	764	48.1%	295	42.6%	53	34.4%	39	65.0%
計	1589		693		154		60	

表15 本文種別（カ系列）

カ系列	カ		カレ		カシコ	
歌	20	1.7%	1	0.8%	3	2.1%
会話	377	32.0%	57	47.5%	68	46.6%
会引	13	1.1%	0	0.0%	0	0.0%
古注	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
古歌	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
左注	5	0.4%	0	0.0%	1	0.7%
詞書	87	7.4%	5	4.2%	2	1.4%
手紙	1	0.1%	0	0.0%	2	1.4%
地の文	674	57.3%	57	47.5%	70	47.9%
計	1177		120		146	

表16 本文種別（ア系列）

ア系列	ア		アレ		アソコ		アナタ	
歌	0	0%	0	0.0%	0	0.0%	11	9%
会話	15	50%	21	67.7%	0	0.0%	44	34%
会引	4	13%	1	3.2%	0	0.0%	3	2%
古注	0	0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0%
古歌	0	0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0%
左注	0	0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0%
詞書	1	3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0%
手紙	0	0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0%
地の文	10	33%	9	29.0%	1	100.0%	70	55%
計	30		31		1		128	

ける出現率はコ・ソ系列よりかなり低い（例数も少ない）。このことから、遠称自体が「歌」に現れにくいといったことは考えられる。ただし、ア系列は「会話」で現れる新しい語形であり、「歌」には用いられなかったということも予想される。なお、「和歌集」におけるカ系列は、「カ」は「歌」一六例「左注」五例「詞書」八七例「地の文」九例、「カレ」は「詞書」五例「歌」一例、「カシコ」は「歌」三例「詞書」二例「左注」一例となっており、「歌」以外で用いられているものが多く、注意が必要である。

次に【Q2】について、「作り物語」は表17に示すように、すべての作品で「地の文」「会話文」の順に語数の割合が高い。そして、本文種別「地の文」の割合が一番高い「作り物語」に、「地の文」に出現率の高い「ゼロ型」「コ・カ」（表13と表15）が安定してみられることは感覚として合う。ただし、『竹取』がやや違う傾向をみせる点については、本文種別から説明ができない。そして、「日記」についても、集計前は「作り物語」と同様の本文種別の構成を想像していたが、そうではなく、表18に示すように、ほぼ「地

の文」(『紫式』九二・六%)の作品もあれば、「会話文」(『和泉三〇%、「歌」も高く二三%)の割合が高い作品もあり、かなり構成が相違する。これが各指示代名詞の出現に影響を与えている可能性がある。

最後に、【Q3】では、「ゼロ型」の中で「歌物語」「伊勢」が、

表17 本文種別の語数(作り物語)

作り物語	竹取		落窪		源氏		堤中	
歌	255	2.5%	1180	2%	13124	2.9%	813	5.2%
会話	4346	42.1%	24146	44%	131535	29.5%	5169	32.9%
会引	117	1.1%	1369	3%	1062	0.2%	206	1.3%
地の文	5224	50.6%	27891	51%	297631	66.8%	9508	60.6%
手紙	374	3.6%	0	0%	2363	0.5%	0	0.0%
計	10316		54586		445715		15696	

表18 本文種別の語数(日記)

日記	土佐		蜻蛉		和泉	
歌	1059	15.8%	6175	13.1%	2465	22.6%
会話	542	8.1%	9457	20.0%	3262	30.0%
会引	7	0.1%	623	1.3%	40	0.4%
地の文	5077	75.9%	31009	65.6%	5124	47.0%
計	6685		47264		10891	
日記	紫式		更級		讃岐	
歌	293	1.7%	1479	10.1%	369	2.4%
会話	989	5.7%	2845	19.4%	3615	23.3%
会引	0	0.0%	372	2.5%	174	1.1%
地の文	16160	92.6%	9964	68.0%	11386	73.3%
計	17442		14660		15544	

表19 本文種別の語数(歌物語)

歌物語	伊勢		大和		平中	
歌	4048	29.3%	4979	21.6%	2815	22.7%
会話	536	3.9%	2394	10.4%	1839	14.8%
会引	0	0.0%	102	0.4%	25	0.2%
地の文	9200	66.5%	15586	67.5%	7724	62.3%
手紙	41	0.3%	30	0.1%	0	0.0%
計	13825		23091		12403	

『大和・平中』と違う傾向をみせると指摘した。本文種別(表19)をみると、『伊勢』は『大和・平中』に比べ、「会話」が低く「歌」が高いが、この本文種別から、なぜそのような傾向がみられるのか説明はできない。さらに、三作品に「ソレ・ソコ」が高いことについても、本文種別からは説明できない。ただし、例えば『伊

勢』の「ソコ」は、すべて「地の文」で(12)のように和歌の背景説明として用いられている。これは、「ソレ」についても同様であり、三作品の「地の文」では、(13)のように用いられているものが多い^{注六}。このような作品による内容(表現形式)が影響している可能性がある。

(12) むかし、男、陸奥の国にすずろにゆきいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおほえけむ『伊勢』、一二六頁
(13) それよりのちなむ、をばすて山といひける。『大和』、三九二頁

以上については、ひとつひとつの例から精査する必要があるが、紙幅の関係からこれ以上は述べることができない。本稿では、中古の指示代名詞の分析において、このような視点もあることを示唆するのみにしておきたい。

六 おわりに

本稿は㉔を用いて、成立年・語形(型)・作者の位相・ジャンル・本文種別から、中古の指示代名詞全体の調査・分析を行い、その出現の傾向を示した。もちろん、古代語の指示体系の究明には、実際に用いられている指示代名詞の用法を精査し、それを積み上げていくことが必要である。しかし、本稿が行ったように、体系全体から観察し、様々な仮説をたてていくことも重要な作業で

あろう。今後は、今回の調査・分析を活かしながら、中古の指示体系の究明を行っていききたい。

一 注

平安時代編・和歌集編を対象とし、和歌集編では『古今和歌集』(平安時代編に含まれるため)と『新古今和歌集』(成立が鎌倉時代のため)を検索対象から外した。なお、㉔において時代名「平安」を検索対象にすると、それぞれ底本の違う『古今和歌集』が検索対象となってしまう。本稿では、『新編日本古典文学全集』の『古今和歌集』を対象とするため、上述の条件とした。

二

現代語では「コノ・ソノ・アノ」は一語として扱われるが、㉔では「コ・ソ・カ(ア) + 助詞「ノ」として扱われている。また、指示代名詞「ア」は語彙素「カ」に含まれており語形で区別されるのに対し、「アレ」は「カレ」とは別の語彙素として扱われ、「カレ」の語彙素は「彼」、「アレ」の語彙素は「彼れ」となっている。なお、語彙素「其」語彙素読み「ソ」には、語形「シ」2例が含まれるが対象外とした。その他、これらの指示代名詞とは別の語彙素として、「ソレソレ」「コレカレ」「カレコレ」「ココカシコ」「アシコモト」「コナタカナタ」がみられる。本稿ではこれについては調査対象外とする。

三

成立年は㉔に基づく。表2以降では、作品名は太字・下線部のものを使用する。

四

随筆と歴史物語は、一作品ずつであるため、対象外とする。

五

中古の各作品の総語数はかなり差があることから、このような形で割合(%)を出し観察した。

六

それぞれの例数を示しておく。「ソコ」『伊勢』「地の文」九例、『大和』「地の文」三例『会話』二例「歌」一例、『平中』「地の文」四

例「会話」一例。「ソレ」「伊勢」「地の文」十四例「歌」一例、「大和」「地」三二例、「会話」三例「歌」一例、「平中」「地」二〇例、「会話」五例。

調査対象

国立国語研究所(二〇二二)『日本語歴史コーパス』(バージョン二〇二一・三、中納言バージョン二・五・二)

<https://cedinjal.ac.jp/chi/> (二〇二二年八月一日確認)

例は、小学館日本古典文学全集12『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』校注・訳、片桐洋一他

参考文献

岡崎友子(二〇一〇)『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房

岡崎友子(二〇二二)「上代の指示代名詞について」『国語と国文学』通

巻一七七号(第九八巻第一二号)

橋本四郎(一九六六)「古代語の指示体系―上代を中心に―」『国語国

文』三五―六

藤本真理子(二〇〇八)「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』九〇

古田東朔(一九五七)「代名詞遠称「あ」系語と「か」系語の差異」『文

藝と思想』一四

付記

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「古代・現代日本語における指示体系の解明」(課題番号20K00636)による。

(おかざき・ともこ 立命館大学教授)